

高等学校地理総合における地域調査の単元モデル開発 —グループ別巡検と 1 人 1 台端末の活用を取り入れた実践—

太田 貴之

千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程

2022 年度より新たに高等学校の必修教科目になった地理総合には、地域調査の単元がある。地域調査の単元では、単元特有の指導方法が必要であるが、地理専門の教員が配置されていない学校があったり、巡検等のフィールドワークを実施する時間的な余裕がなかったりするため、十分に実施できていない学校も存在する。そこで、地理総合を担当する教員の一助とするために、フィールドワークを取り入れ、1 人 1 台端末を活用した地域調査の単元モデルを開発する。開発した単元を高等学校にて実践し、作成した単元モデルの有効性と課題について検証した。その結果、細かい点については課題が残るものの、グループ別巡検を取り入れ、1 人 1 台端末を活用した部分については、生徒もおおむね順調に取り組むことができ、単元モデルの開発の観点からは、一定程度の成果があったといえる。

キーワード：地理総合、地域調査、巡検、フィールドワーク、1 人 1 台端末

1. 問題の所在

1.1. 高等学校地理総合における地域調査の位置付け

地域調査は、学校周辺など生徒にとって身近な生活圏の地域を対象に、地図や資料を読み取ったり、現地で調査活動を行ったり、調査した結果を発表したりするなどの学習活動を行う単元である。

2022 年度より始まった高等学校地理歴史科の新しい必修教科目・地理総合において、地域調査の単元は、大項目「C 持続可能な地域づくりと私たち」の中項目「(2) 生活圏の調査と地域の展望」として位置付けられている。

高等学校学習指導要領によると、次の事項を身に付けるように指導することとなっている（表 1）。

表 1 「生活圏の調査と地域の展望」の中項目において重視される資質・能力

観点	資質・能力
知識及び技能	(ア) 生活圏の調査を基に、地理的な課題の解決に向けた取組や探究する手法などについて理解すること。
思考力、判断力、表現力等	(ア) 生活圏の地理的な課題について、生活圏内や生活圏外との結び付き、地域の成り立ちや変容、持続可能な地域づくりなどに着目して、主題を設定し、課題解決に求められる取組などを多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。

Takayuki OHTA : Development of a Practical Model for Field-based Regional Study in High School Geography : Incorporating Group Excursions and One-to-One Devices
Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs, Chiba University

学習指導要領の記述からは、地理的な事象について理解したり、考えたりすることに留まらず、地理的な課題の解決に向け、取組や探究の手法について理解したり、主題を設定して多面的・多角的に考察、構想し、表現するなどの実践的な理解や思考、表現が求められるといえる。

また、学習指導要領の「内容の取扱い」には、「地域調査を実施し、生徒が適切にその方法を身に付けるように工夫する」ことが書かれており、実際に調査することが求められている。さらに、高等学校学習指導要領解説地理歴史編には、GIS（地理情報システム）を使用した地図作成、調査計画に基づいたフィールドワーク（巡検等）など、地理ならではの技能を活用することが言及されている。

地域には様々な要素が含まれている。そのため、自然環境、産業、人口、歴史、交通、観光、環境問題、防災など、他の単元で学習することと関連づけて、地域を調査する必要がある。さらにその上で、地理的な技能を活用して、実践的な調査、考察、表現することが求められている。授業者にとっても、事前の念入りの準備、その場に応じた助言など、他の単元とは異なる指導が必要であるといえる。

1.2. 地理総合を担当する教員

前述のように地理総合は、2022 年度より高等学校地理歴史科に設置された新科目である。従来設置されていた地理 A・B は必修教科目ではないため、全ての高等学校において地理科目が設置されていたわけではなかった¹。そのため、地理を専門とする教員が配置されていない学校もあった。

しかし、新科目・地理総合は必修教科目であるため、地

理を専門とする教員がいる、いないに関わらず、全ての学校で地理総合が開講されている。では、地理総合を担当する教員の状況はどうなっているのだろうか。

石毛ら (2020) は、2019 年度に千葉県内の公立高等学校 129 校を調査対象として、地理専門教員数の調査を実施した。108 校から回答を得ることができ、地理専門教員数は「0 人 39 校 1 人 51 校 2 人 16 校 3 人 2 校 4 人以上 0 校」という結果を得ている。

また、竹内 (2018) は、地理がこれまで選択科目であり、履修者が少なかったこと、少子化や偏った教員年齢構成による教員採用数の抑制などが影響して、地理担当教員の採用数は減少の一途を辿り、地理総合を教える地理教師がおらず、地理を専門としない地理歴史科教員のケアが地理教育存続の命脈を握っていると述べている。

このように、地理専門の教員が未配置の学校では、地理以外が専門の教員が地理総合を担当することになり、こうした教員に対してのケアも必要となってくる。

教科全体の授業時間数がそこまで変化がない中で、地理専門の教員が急増するとは考えづらい。そのため、学校によっては、すべての高校生が学ぶ地理総合を、地理専門以外の教員が担当し、授業をつくる必要が生じている。

1.3. 地理総合における地域調査の状況

地理専門以外の教員が担当することもある地理総合において、現場の教員は地域調査の単元についてどのようにとらえているのだろうか。山本 (2024) は以下のように述べている。

「地理総合」の必修化にあたって、これまで何人かの先生とお話をしてきました。いずれも、地理を専門としない、高校や大学で地理を学んでいない方です。その中で、皆さんの不安や疑問が最も集中する部分が、大項目 A の「地図・GIS」と、この「生活圏の調査」でした。2 単位の必修科目において、「地域調査」を「外を歩く」形で、つまりフィールドワークを行うとなると、時間に余裕のない中で話を聞かせながら、40 人の生徒たちを連れて歩かねばなりません。地理を専門としている教員であっても躊躇するところがあります。ましてや、赴任直後で学校周辺地域にほとんどなじみのない若い先生方にとっては、フィールドワークどころではないというのも当然でしょう。

まず、地理を専門としない教員が不安と感じている項目として「地図・GIS」²と「生活圏の調査（地域調査）」があげられている。地図・GIS の読み取りや作成、フィールドワークなどは歴史や公民の授業ではあまり扱われることのない地理ならではの授業内容や授業方法であり、抵抗があると考えられる。

また、2 単位（週 2 時間）の科目において、フィールドワークを取り入れた地域調査については、時間に余裕がないとも述べられている。フィールドワークを行うだけでも最低 1～2 時間はかかり、事前の準備や事後の活動まで考えるとさらに時間がかかる。また、地域調査の単元は、学習指導要領では、地理総合の最後の単元として位置づけられており、順番通りに学習するとなると、フィールドワークを実施する余裕はますますなくなると考えられる。

上記の授業時間の問題の他にも、松岡 (2012) は、地理教育巡検（フィールドワーク）の実施を阻む要因として、生徒指導上・交通事故への心配から学校から許可が出にくいこと、引率体制の問題、地理教員が巡検学習について訓練や経験の不足から実施にためらいがあること、学区内に学習対象となる地理的事象が少ないこと、巡検をどのように実施したらよいかわからないことをあげている。

また、地域調査の単元は教科書において、ある特定の地域が事例として取り上げられている。しかし、各学校の授業者が授業で実際に取り上げる地域については、教科書にも教師用指導書にも記載されていない。そのため、授業者が何もない状態から資料を集め、地域について把握する必要がある。この点も、地域調査の単元の実施を難しく感じさせる要因となっていると考えられる。

このように、地域調査の単元の実施には難しさがある。池 (2012) は「発達段階的に最も活発に地域調査が行われていると思われがちな高校でも、実施率は意外に低い」と述べており、フィールドワークを行うこと以前に、地域調査の単元自体がそもそも実施されていない学校があるということが示されている。

1.4. 地理教育における 1 人 1 台端末と先行実践

フィールドワークを取り入れつつ、限られた時間で地域調査の単元を実施するためには、フィールドワーク以外の教室での学習と作業（デスクワーク）の時間を効率的にかつ、学習効果を下げることなく進める必要がある。そこで検討したいのが ICT の活用である。文部科学省では 1 人 1 台端末を取り入れた「GIGA スクール構想」を推進している。現在では、1 人 1 台端末の活用が各校種・各教科で進められているが、高等学校地理教育においてはどの程度進められているのだろうか。

太田 (2021) は、交通の単元において、生徒が 1 人 1 台コンピュータを使い、Web 地図を活用した交通に関する調査を行い、調査結果を Google フォームに入力し、入力内容をスプレッドシートで共有するという授業を実践した。

齋藤ら (2021) の実践の中で、地理 A の授業者である松本は、自然環境（地形）の単元において、個々の生徒が地理院地図を用いて、祖谷川地区の V 字谷の地形の発達度合いを把握させる授業を実践した。

徳倉 (2023) は、地域調査の単元において、個々の生徒がタブレット端末を使い、RESAS (地域経済分析システム) を活用して、授業者が設定した課題テーマについて調査し、レポート (手書き) にまとめる授業を実践した。

三つの実践では、生徒全員がコンピュータもしくはタブレット端末を用いて、Web 地図を含めた GIS を活用している。また、太田 (2021) では、調査結果を入力する場面と入力内容を全生徒に共有する場面においても ICT を活用している。

地域調査の単元では巡検 (フィールドワーク) の他に、事前学習、巡検後の分析、調べ学習、発表準備、発表など様々なデスクワークの場面がある。先行実践をふまえると、1 人 1 台端末等の ICT を活用することで、効率的にかつ、学びのあるデスクワークを行うことができるのではないだろうか。

例えば、グループで地域調査を行う場合に 1 人 1 台端末を持っていれば、一人は地理院地図を用いて地域の地形について調査する、もう一人は JSTAT MAP³を用いて、地域の人口分布について調査することなどが想定できる。役割分担を行うなどグループの人数を生かすことで、デスクワークの時間を短縮し、効率的にかつ学びのある地域調査となると考えられる。

1.5. 巡検を取り入れた地域調査に関する先行実践の検討

本節では、高等学校地理科目における地域調査の単元において、巡検 (フィールドワーク) を取り入れている四つの実践について検討する。

一つ目は、今井 (2012) や山内 (2012) の「ワンポイント巡検」の実践である。この二名は、実施が難しい巡検学習をワンポイント巡検という実施しやすい形で取り入れている。ワンポイント巡検とは、1 単位時間で、学校周辺にある少数の事象に絞って行う巡検である。実施後の時間において、巡検中に観察したことをまとめる時間を取っている⁴。

二つ目は、常井 (2012) の実践である。この実践は、大学教員や市役所と連携して、助言をもらったり、質問したりして、テーマを決め、フィールドで調査を行い、調査結果を分析し、発表するもので 10 時間の単元となっている。この実践では、単に地域の様子をまとめるだけではなく、テーマを設定し、実際に調査する活動を行っている。

三つ目は、泉 (2021) の「学校周辺のまちづくり」の実践である。この実践では初回の授業において、学校周辺地域の野外観察を行い、気づいたことや疑問点をメモに取り、興味深い事象を写真に撮る活動を行う。その後の時間において、気づいたこと・感じたことに基づいてグループごとに課題を追究し、発表、討議を行うというものである。

四つ目は、山本 (2022) の実践である。この実践では、単元の 2 時間目において、授業者があらかじめ設定したポ

イントについて、説明しながら引率する巡検が取り入れられている。その後、フィールドワークやデスクワークでの気づきをもとに地域の課題を見出し、生徒に立場が異なる役割を与え、課題解決のための協議 (ロールプレイ) を行うというものである。

四つの実践のうち三つの実践では、教員 1 名で同じコースを巡ったり、訪問地点があらかじめ決められたりしている巡検となっている。常井実践については、複数の機関と連携し、グループで地域について調査をする際に巡検を取り入れている。

また、ICT の活用に関しては、調査後の発表準備や発表時においては、活用がみられなかった。それ以前の地理院地図などの Web 地図やインターネットによる調査の場面において、活用している場面がみられた。

1.6. 単元モデル開発の必要性

これまでの内容をまとめると、新科目・地理総合は必修教科目であり、全ての高等学校において科目が設置されているが、地理専門以外の教員が担当する学校も少なくない。また、地理総合の学習内容の中でも、地域調査については、地理ならではの授業内容や授業方法となっており、特に巡検 (フィールドワーク) については、実施するハードルが高いものとなっていることがわかった。

そこで、先行実践の検討の踏まえ、巡検 (フィールドワーク) を取り入れ、1 人 1 台端末を活用した地域調査の単元モデルを開発する。開発することにより、全国で新科目・地理総合を担当する教員の一助になると考えられる。

2. 研究の目的と方法

2.1. 研究の目的

本研究の目的は、高等学校地理総合において、フィールドワークを取り入れ、1 人 1 台端末を活用した地域調査の単元モデルを開発、実践して、その考察を行うことで、作成した単元モデルの有効性と課題を明らかにすることである。

2.2. 研究の方法

本研究では、フィールドワークを取り入れ、1 人 1 台端末を活用した地域調査の単元モデルを授業担当者である筆者がどのように作成したのか、その過程について記述する。これは、実践校が異なることにより、本論文で示す授業をそのまま実施できない場合においても、授業内容や授業方法の意図や経緯を示すことにより、地理総合を担当する教員が単元を作成したり、改良したりできるようにするためである。

また、単元モデルについて客観的な評価を行うために、生徒による事後アンケートの数値や記述を取り上げて、単

元の考察を行い、作成した単元モデルの有効性と課題について検証する。

3. 単元の開発

3.1. 授業実践校の概要

単元を作成する前提として、筆者が授業を行う授業実践校（以下、実践校と表記する）について、簡単に述べる。

授業実践を行う学校は、千葉県の中央部に位置する公立高等学校（中高一貫教育校）で、生徒のほとんどが大学進学を希望している学校である。

また、千葉県立の学校では BYOD による 1 人 1 台タブレット端末を活用が進められており、実践校においては、2023 年度の高校 1 年生から、生徒の各家庭でタブレット端末（ノートパソコンでも可）を購入し、授業で活用している。なお、タブレット端末を購入するにあたり、必要なシステム要件とそれを備えた学校推奨モデルを入学前の資料で各家庭に伝えている。システム要件を備えていれば、推奨モデル以外の機種でも問題ないが、多くの生徒は学校が提示した推奨モデルを購入している。

3.2. 単元の作成

3.2.1. 授業で扱う地域について

地域調査は、学習指導要領における中項目名では、「生活圏の調査と地域の展望」となっている。「生活圏」とは、普段の日常生活で行動する地域・範囲のことを指している。高校生の生活圏ということを考えると、自宅周辺、通学路、学校周辺などがあてはまる。高等学校学習指導要領解説では、授業で扱う生活圏について、学校周辺の狭い地域から通学圏といった幅広い地域など弾力的に設定できると述べられている。このうち、筆者は学校周辺地域を授業で扱うことがふさわしいと考える。

その理由として、高校生は幅広い地域から通学しており、学校周辺地域になじみのない生徒も多くいる。特に、高校 1 年生の段階では、地域について知らないことが多かったり、そもそも興味を持っていないことがあったりすると考えられる。

しかし、自然災害に対する防災・減災についての観点から、地形や避難場所、交通網、商業施設などの地域の特徴を理解しておくことは重要であると考えられる。

また、この地域に興味を持っている、いないに関わらず、生徒はこの地域に 3 年間通学し、地域の一員として既に組み込まれている。学校周辺地域に興味を持っていないという場合、興味を持つきっかけがこれまでなかったことが考えられる。授業で学校周辺地域について扱うことで、学校周辺地域特有の特色に気づき、地域への親しみが生まれることもあると思われる。

このように、地域調査の単元を実施する際、学校周辺地

域を対象とすることは、大きな意義があるといえよう。

3.2.2. 授業を実践する時期について

実践校では、地理総合は高校 1 年に 2 単位科目として設置されている。地域調査の単元は、学習指導要領の順番どおりに実施すると、2 月～3 月頃の年度末の実施となるが、本研究では 10 月～11 月頃に実施することとした。その理由は二点ある。

一点目は、必要な授業数が不足することを防ぐためである。地域調査の単元では、実際に調査を行い、調査結果から考察を行い、発表を行う。一時間の授業内で一テーマが完結する通常の授業とは異なり、地域調査では、生徒が主体となって調査活動や発表活動を行うので、余裕を持った授業計画を作成する必要がある。年度末の 3 月に実施すると授業時間に余裕がなくなるため、年度途中の実施とする。

二点目は、3.2.1.において、学校周辺地域を授業で扱うことは、地域に親しみを持つこと、防災・減災においても重要であることを述べた。実践校では高校 1 年に地理総合が設置されているが、これら二点のことを考えると、年度末ではなく、できるだけ早い時期に地域調査の単元を実施したいところである。

だが、新年度が始まってすぐの 4 月に実施するのは、難しいと思われる。この理由として、自然環境や生活文化、地球的課題などの内容は、本単元の前に扱っても、後に扱っても大きな支障はないと思われる。しかし、地域調査を実施する際に必要となる地図（地形図・統計地図等）の読み方や Web 地図⁵の扱い方などの地理的な技能は、地域を調査する過程において必須である。そのため、学習指導要領において、地理総合の最初の大項目として示されている「A 地図や地理情報システムで捉える現代世界」を少なくとも扱った後に実施することがよいと考えられる。

もちろん、この時期に地域調査の単元を実施するということは、大項目 B「国際理解と国際協力」をすべて学習しきっていない段階ということになる。そのため、1.1.で述べたような他の単元で学習する内容と関連付けて地域調査を行うということにそぐわないとも見て取れる。しかし、他の内容を学習していない段階においても、必要な内容は、調査の過程において、教科書等の教材を用いて個人や周囲の人々、授業者などから学ぶことができる。

本研究では以上の理由より、授業時数に余裕を持つことや早めに地域について学習することの利点をふまえ、年度途中での実施とした⁶。

3.2.3. 生徒の該当地域に関する前提知識について

生徒は学校周辺地域について、どれだけの前提知識（地理的な把握）を有しているのだろうか。日々、通学路の往復だけで、通学路以外について全く地域について把握していない者もいると思われる。生徒自身も地域についてどれ

だけ知っているかと問われたとき、口頭で答えるのは難しいと考えられる。そこで、単元の初回授業において、地域についてどれだけ把握しているについてのレディネスチェックを行うこととした。

また、授業後に生徒の地域に対する認識として、どのような変容があったかについて検証するためにも、初回にレディネスチェックを行うことは有効である。

生徒には以下の指示を出した。

- ①このプリントの余白部分に学校を中心とした地域の地図を何も見ないで描き出す。範囲は〇〇駅、△△駅、◇◇公園、□□駅あたりまで。知っている施設や建物などもできるだけ詳しく描き出す。施設の名称などは地図に書く。
- ②現時点で学校周辺地域に抱えている地域の特徴（魅力や課題点等）をプリントの余白に記述する。
- ③（時間に余裕があれば）地域の地理院地図を印刷したプリントを見て、自分の描き出した地図と実際の地図を比較して見る。直す場合には赤ペンを使用する。

①の作業は、地域の地図をできるだけ詳細に描き出すことで、生徒が頭の中で認識している地図（メンタルマップ）を取り出してみようとするものである⁷。生徒により通学路は異なり、また、公園や図書館などの施設に立ち寄ることがあれば、同じ地域でも地域について有している認識に違いが出る。どのように自分自身が地域について認識しているのかについて、生徒自身が把握することが目的である。

②の作業は、単元終了後、生徒が地域に対する認識がどのように変容したかを生徒自身がみるために記述する。

③は自身の認識している地域と実際の地域の差異を把握するために行うが、この後、新旧地形図の比較等のデスクワークや巡検にて実際の地域を見る時間がある。そこで、①、②は生徒により作業時間が異なるため、時間に余裕のあるもののみ、取り組むこととした。

3.2.4. フィールドワークの形態について

生徒の安全面や授業のしやすさを考えると、地域の特徴的な場所をクラス全員で巡検し、そこで得た気づきなどをもとに、調査活動については学校内で行うといった授業が考えられる。

しかし、全員で同じ場所を巡るということは、教員が選定した地域の特色ある場所を全員で把握することができ、一方で、生徒の多様な気づきを制限してしまう可能性がある。また、生徒の自由な発想で問いを立てた後に、調査活動の段階でフィールドワークを行い、地域を観察したり、聞き込みをしたりした方が調査活動も深まる。

そこで、本研究ではフィールドワークのうち、5名程度のグループ別の巡検（Excursion）を取り入れ、グループごとに問いを立てさせて、実際の地域にて調査活動を行うこととした⁸。

実践校では、5名よりも少ない個人や少人数での調査・発表も可能であると考えられる。しかし、授業時間に限りがあるため、巡検後の発表準備時間は2時間、発表時間は1時間のみとしたい。発表準備時間が少ないことについては、5名いることを生かして、協働的で効率的な作業を行うように指示をする。

なお、グループ別巡検をするにあたっては、安全面への配慮が求められる。グループ別巡検中には授業者は付かないが、事前に安全に関する指導を行うことについて、学校長名の入った保護者宛文書を作成して、理解していただくこととした。

3.2.5. 1人1台端末の活用について

本単元では、グループ別巡検を行い、フィールドに出て地域調査を行う。実際にフィールドに出ると、時間がかかるがそこは削ることはできない。それ以外の教室でのデスクワークの部分で時間をできるだけ短縮したい。

3.1.で述べたように、千葉県公立高等学校では、BYODによる1人1台端末を活用することになっている。Web地図を使ったり、インターネットで調査したり、調査結果をまとめるためにスライド資料を作成する際に、1人1台端末を使用する。効果的にICTを活用し、グループの人数を生かすことで、デスクワークの時間を短縮し、単元全体の時間を短縮することができるよう計画した。

3.3. 単元の授業計画

レディネスチェックと地域の概要把握で2時間、巡検の計画で1時間、グループ別巡検（フィールドワーク）で2時間、巡検後のデスクワークと発表準備で2時間、発表で1時間の合計8時間扱いとする。

作成した単元の授業計画は表2のとおりである。

表2 単元の学習計画

時間	主な学習活動	
	〔 ○本時のねらい ・学習活動 ※使用する ICT・Web 地図 〕	
	○単元全体の課題 学校周辺地域が抱える課題を探究するためには、どのような方法で地域の特徴をとらえ、どのように課題解決のための展望を見いだしていけばよいのだろうか。実際に現地調査を行い、検証を行う。	
1	・	○地域調査を行うための前提知識となる学校周辺地域の概要について把握する
2		・学校周辺の手描き地図を、何も見ないでできるだけ詳細に描く ・新旧地形図（今昔マップ）を使用して、地域の年代別変化を読み取る ・校舎の屋上に行き、地域の全体的な景観や方面による違いを観察する ・学校の周辺環境や学校が位置する地域の特色について

	<p>資料で確認する</p> <p>※今昔マップ (新旧地形図比較サイト)</p> <p>※Microsoft Teams (Word ファイルを共有し、各個人が一つのファイルに読み取ったり、観察したりしたことを入力する)</p>
3	<p>○地域調査のテーマ及び問いとそれらに見合うグループ別巡検計画を立案する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで八つのテーマから、1つのテーマを選択する。 ・グループで地域調査の問いを設定する。 ・問いに解答するための巡検計画を考案する <p>※地理院地図、Google マップなど</p>
4	<p>○グループ別巡検を行い、問いに解答するための現地調査を行う</p>
5	<p>・計画に基づいて巡検を行う</p> <p>・現地を観察したり、聞き込みを行ったりするなどの現地調査を行う</p> <p>※スマートフォンのカメラ等</p>
6	<p>○グループ別巡検の結果の分析及び、デスクワークによる裏付けを行い、問いに対する解答をまとめ、発表準備を行う</p>
7	<p>・現地調査の結果を分析・考察する。</p> <p>・デスクワークとして、巡検で分かったことの背景の部分について調べる。</p> <p>・5人いることを生かして、短い時間でスライド作成、発表準備を行う</p> <p>・問い、魅力、課題、調査結果、問いの答え、提案などをスライド資料に入れる</p> <p>※Microsoft Teams (PowerPoint を班内で共有して、共同編集を行う)</p> <p>※インターネットによる調査</p> <p>※地理院地図、Google マップなど</p>
8	<p>○グループごとに教室内で発表を行い、調査結果の共有を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで順番に発表を行う ・各班の発表を聞いている人はフィードバックのために、フォームにコメント等を入力する ・発表終了後に、事後アンケートとまとめの課題を Microsoft Forms に入力する (時間がない場合には、授業外の時間に課題として実施する) <p>○まとめの課題の内容 (200 文字以上)</p> <p>学校周辺地域調査の単位 (手描き地図作成から全グループの発表) を終えた今の時点で、学校周辺地域についてあなたがどのように認識しているか (思いや考えなど)、建物や地名など具体名を入れながら、できるだけ詳しく述べてください。</p>

4. 授業実践とその考察

4.1. 各時間の展開

4.1.1. 1・2 時間目

最初の 2 時間は、グループ別に地域調査を行う前に、デスクワークにて地域の全体像を把握する時間である。

まず、3.2.3. で述べたように、学校周辺の手描き地図をなにも見ないでできるだけ詳細に描かせた。その際、覚えている限りの施設や建物も描くように指示した。

以下は、生徒が描いた地図の一部である (図 1)。

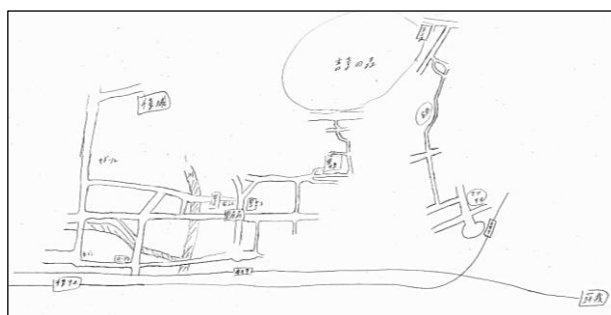


図 1 生徒が描いた地図

地域全体について詳細に描けている生徒は、ほぼいなかった。実践校は周囲の 3 つの路線を利用できるので、各々が利用する駅から本校までといった自分の普段使う通学路はそれなりに細かく描けていても、他の道については曖昧である場合が多かった。また、部活動によっては、学校近くの公園で練習することがあるため、本校からその公園の道が他者よりも細かく描けていた。このように、各個人の普段の生活に対応して、学校周辺地域のメンタルマップが形成されていることがわかった。

また、この他に、Web 上の新旧地形図「今昔マップ⁹⁾」(図 2) を使用して、地域の年代別変化を読み取ったり、校舎の屋上に行き、地域の全体的な景観や方面による違いを観察したりした。読み取ったり、観察したりした内容は、Microsoft Forms に入力した。また、学校の周辺環境や学校が位置する地域の特色について授業者が作成した資料で把握することをした。



図 2 今昔マップ

4.1.2. 3 時間目

3 時間目から、グループ別巡検に関わる活動に入った。まず、グループを組んだ。グループについては、グループを組む時間を少しでも短縮させるために、その当時、教室で着席している近くのメンバーどうして組むこととした。ただし、時間に余裕があれば、生徒各自が興味・関心のある項目を出し、類似の項目どうして組ませるという手法もあるだろう。

地域調査を行う際には、テーマと問いを設定する必要が

ある。このとき、何も手がかりがない状態で「テーマを設定し、問いを立てよ」と指示をしても、どのようなテーマにして、どのような問いを立てればよいのか、生徒は困ってしまうだろう。

そこで、八つのグループに対して、授業者から観光、交通、商業、防災、環境、街並み、高齢者、子育ての八つのテーマを提示して、各グループが希望のものを選択することとした。この八つのテーマは教科書に記載されているテーマ¹⁰を参考に、学校周辺地域を調査対象とした際、調査しやすいものを授業者が設定したものである。テーマを授業者が設定することで、生徒たちは問いを設定しやすくなるとともに、八つのテーマに各グループが分かれることで、地域を多面的に調査することにもつながる。

そのため、各グループが調査するテーマは重ならない方がよい。そのため、一つのテーマに対して、選択できるのは一つのグループのみとし、希望が重なった場合には、第 2 希望以下のものを選択することとした。

テーマが決まったら、グループごとにテーマにあった問いを設定する。この問いについて、次回からのグループ別巡検やデスクワークで答えを探すことになる。しかし、この時点で適当な問いを考えるのは難しい。実際に、巡検で地域に出たときに問いが変わるということもありうる。そのため、ここでは仮の問いを設定させ、その問いに応じた巡検計画を 2 時間分立てることとした。訪問する順序は、地理院地図を印刷した地域の地図に書き込ませた。

4.1.3. 4・5 時間目

この 2 時間はグループ別巡検の時間である。2 時間連続授業ではなく、1 時間×2 回で実施した。

授業開始時には、靴に履き替えて校内の所定の地点に集合するように指示した。集合したグループから出発し、授業終了時まで、帰着の報告をすることとした。

次の授業があるため、時間が厳しい場合には途中で計画をカットするなど臨機応変に対応すること、交通安全に留意すること、不測の事態が生じた場合には、授業者もしくは学校に連絡することを事前指導した。また、巡検時の持ち物として、以下のものを指示した。

- | | |
|------------------|----------------|
| ○持ち物 | |
| ・地理院地図を印刷した地域の地図 | ・メモ用プリント |
| ・筆記用具 1 本 | ・スマートフォン (カメラ) |
| ・クリップボード (探検ボード) | ・貴重品 |

生徒たちはグループごとに施設の訪問や、景観の観察、聞き取り調査を行った。できるだけ多くのメモを取り、多くの写真を撮影するように伝えた。

4.1.4. 6・7 時間目

6・7 時間目の 2 時間を使用して、グループ別巡検の結果の分析及び、デスクワークによる裏付けを行い、問いに対する解答をまとめ、発表準備を行った。ここでは、1 人 1 台端末を活用して、効率的かつ協働的に作業を行う時間である。

Microsoft PowerPoint を用いて、発表時間約 3 分のスライド資料の作成を行った。スライド資料は Microsoft Teams で共有して、共同編集を行った。スライドを作成しやすくするために、地域における自分たちのテーマに関する魅力と課題、問いの設定と解答、地域への提案等の内容を盛り込むとよいことを授業者から生徒たちに伝えた。なお、地理の授業であるため、地理院地図の色別標高図、Google マップのマイマップ機能を用いて施設の分布を作成した地図など、地図に関してはスライドに必ず入れることを条件とした。

また、巡検の調査の結果に偏らないように、書籍やインターネットで調べたこと、地理院地図など Web 地図での調査などデスクワークに関する内容も資料に入れることを助言した。

2 時間で作業が完了しないグループもあったが、それらのグループについては、作成したスライド資料は、Microsoft Teams 上に提出することとした。

4.1.5. 8 時間目

発表時間約 3 分でグループごとに発表を行った。事前に筆者が各グループのスライドを順番につなぎ合わせ、グループごとのスライドを切り替える時間を短縮するように工夫した。発表時には、発表と発表の間の入れ替わり時間として約 1 分ずつとった。

グループは約 5 名ずつで構成されているが、発表方法は各グループに任せた。多くの班は、5 名が一人ずつ分担を決めて順番に発表していた (図 3)。中には、巡検中の聞き取り調査を再現して、劇を取り入れている班もあった。



図 3 発表の様子

発表内容 (班が設定した問い) として、以下のような内容があった。テーマ別に示す。

①観光
・〇〇城や〇〇神社というとても魅力的な施設があるのになぜ、学校周辺は観光客が少ないのだろうか？
・〇〇周辺は外国人観光に向いているか
②交通
・学校周辺地域の交通問題とその解決策
・〇〇高校周辺の駅で栄えている駅はどこか？
③商業
・商業施設はどこに密集しているのか
・学校周辺に商業施設が少ない理由
④防災
・学校周辺地域の被害の規模・避難の仕方を予測できるか
・周辺地域でそれぞれの災害の観点から見て安全なのはどこか（津波・土砂災害・地震）
⑤環境
・学校周辺地域にポイ捨てについて
・学校の周りは生き物に優しい環境なのか
⑥街並み
・学校の南北における住みやすさの違い
・〇〇駅付近と学校付近の街並みの相違点から見る街の将来性
⑦高齢者
・高齢者にとって住みやすい街か
・高齢者にとって住みよい街とは？
⑧子育て
・駅・学校周辺の子育て環境について調査する
・学校周辺地域の子育てに適する点と適さない点

なお、時間の都合から、質疑応答は行わない。その代わりに、発表グループどうしの入れ替わりの時間に、1人1台端末を活用して Google フォームにコメントを入力することとした。Google フォームに入力した内容は、リアルタイムでスプレッドシートに共有されるため、発表に対するフィードバック機能としての役割を持たせた（図 4）。

発表の終了後に、事後アンケート（振り返り）とまとめの課題を Microsoft Teams に入力する時間を設定していたが、多くのクラスで発表時間が超過した。それらのクラスについては、授業外の時間に入力することにした。

4.2. 事後アンケートとその考察

事後アンケートの結果から、本研究で作成した単元について考察する。回答数は 313 だった（回答率 97.8%）。

質問 1：グループ別巡検の計画・実施・情報整理・発表について、難しかったか、簡単だったかについて答えてください。

表 3 質問 1 の結果¹¹

	人数	割合
5 難しかった	10 人	3%
4 ↑	158 人	50%
3	111 人	35%
2 ↓	30 人	10%
1 簡単だった	4 人	1%

質問 2：グループ別巡検の計画・実施・情報整理・発表について、地理の学びになったか、学びにならなかったかについて答えてください。

表 4 質問 2 の結果

	人数	割合
5 学びになった	149 人	48%
4 ↑	125 人	40%
3	35 人	11%
2 ↓	2 人	1%
1 学びにならなかった	2 人	1%

質問 3：グループ別巡検の計画・実施・情報整理・発表について、面白かったか、つまらなかったかについて答えてください。

表 5 質問 3 の結果

	人数	割合
5 面白かった	183 人	58%
4 ↑	99 人	32%
3	26 人	8%
2 ↓	3 人	1%
1 つまらなかった	2 人	1%

質問 4：グループ別巡検の計画・実施・情報整理・発表について、あなたが意欲的に取り組んだか、意欲的に取り組んでいないかについて答えてください。

	B	D	E
1	自分のクラス	何班へのコメントか？	コメント（良かった点・学びになった点など）を書いてください。わかりやすく、具体的にコメントしてください。匿名です。
2	1A	2班	道幅についての地図上で幅を比較する資料がわかりやすいと思いました。ほかの地域との比較もよかったと思いました。
3	1A	2班	それぞれの地元と比較することで内容の理解が深まった。また、ところどころにユーモアがあり面白かった。
4	1A	2班	ほかの地域との比較や、道幅などの調査などからしっかり深いところまで調査できていると感じた。
5	1A	2班	高齢者が暮らしやすいまちづくりについてしっかりと考えられていて良かったと思います。
6	1A	2班	課題を挙げるだけでなく、解決策も考えられていて良かった。

図 4 各班へのコメントが表示されたスプレッドシート

表 6 質問 4 の結果

	人数	割合
5 意欲的に取り組んだ	144 人	46%
4 \uparrow	128 人	41%
3 \downarrow	37 人	12%
2	2 人	1%
1 意欲的に取り組まなかった	2 人	1%

質問 1～4 は、5 段階の選択肢から選ぶ形式の質問項目である。質問 1 は、授業（グループ別巡検）の難易度を答える項目であるが、選択肢 4 を選ぶ生徒が多く、やや難易度が高いと感じた生徒が多かったようである。しかし、グループ別の巡検や発表準備、発表などは科目において初めて実施した授業形態だったため¹²、難しく感じて当然だともわれる。また、選択肢 3 を選ぶ生徒も 35%おり、おむね適切な難易度だったと考えられる。

質問 2 は、地理の授業としての学びになったかどうか、生徒の立場から回答する項目である。選択肢 4・5 が約 9 割を占め、学校周辺地域を扱ったり、普段とは異なる授業方法を用いたりしても、多くの生徒が学びになったと感じたようである。

質問 3 は、授業の面白さについて質問した項目であるが、この質問項目も約 9 割の生徒が選択肢 4・5 を選び、多くの生徒が面白さを感じたようである。

質問 4 は、生徒が意欲的に取り組んだかについて質問した項目である。選択肢 4・5 を選択した生徒が約 9 割を占め、多くの生徒が意欲的に取り組めたことがわかる。

質問 5：今の時点での地域に対する認識は、この単元を学習する前と変化していますか。

表 7 質問 5 の結果

	人数	割合
変化した	224 人	72%
変化していない	89 人	28%

質問 5 では、単元を実施する前と後で、地域に対する認識が変化したと質問した。必ずしも「変化した」の人数が多ければ、よいというわけではないが、7 割以上の生徒が、グループ別巡検等を行った結果、地域に対する認識について、「変化した」と感じており、単元を実施した意味があったと考えられる。なお、どのような変容があったのかについても質問したが、地域が特定されるような内容が多いため、本論文では割愛する。

質問 6：その他、コメントがある場合には記述してください。（自由回答）

（回答の抜粋）¹³

- ①利点・改善点という角度から街を見るという経験はあまりなかったので、今回このような巡検を経験できて良かったです。これからも、このような見方を大切にして学習に取り組んでいきたいです。
- ②実際に巡検に行った場所は本当に一部分だったので、また違う場所を歩いて、地域の様子を肌で感じたいなと思った。
- ③〇〇周辺を地図を使って調べるだけでなく、実地調査を行い実際に見てわかることが多くあったので、実際に現地を調査することができてよかったと思いました。
- ④調べ学習だけで済ませないで自分で足を運んで実際に見て考察したりすることでもっと学びが深くなるなと思いました。
- ⑤今までの社会の授業の巡検（地域調査）はただ地域を散歩してどこに何があるか知るのがメインであり楽しくなかったけど、テーマ別に調査したことで、今までより調査する意味を感じられて有意義なものになったし、何より楽しめた。
- ⑥〇〇高校付近を探索できる機会を設けてくださってありがとうございました。班で協力してひとつの作業をすることで新たな視点を取り入れられとても良い学びになりました。
- ⑦3分という短い時間の中でたくさんの調べたこと、実際に街を歩いて気づいたこと、地図と照らし合わせて考察したことなどたくさんの情報をまとめて、班員で分担して発表するのは大変でした。（中略）たくさんの学べるのがみんなの技術の中にあるなと思いました。
- ⑧授業内での準備時間が少なかったのもっとグループで計画的に準備すべきだったと思いました。

①～④の回答からは、地域を巡検したことについて、有意義だったことが伺える。特に、教室での学びとは異なる巡検ならではの学びに、意義を見出しているようである。

①、⑤の回答からは、単に巡検するのではなく、テーマ別に問を立てて調査したことについて、学びを見出している。40 人で地域を歩くだけではなく、本研究で取り入れた、グループ別巡検を行って調査することが有効であったことが伺える。

⑥・⑦の回答からは、グループで学習することで、新たな視点が得られたり、学びがあったりしたことがわかる。一方で、⑦・⑧の回答からは、グループで作業することの難しさも感じているようである。

5. 研究の成果と課題

本研究では、フィールドワーク（グループ別巡検）を取り入れ、1 人 1 台端末を活用した地域調査の単元を開発して、実施した。

授業の様子や生徒の事後アンケートからは、グループ別に問いを立て巡検を取り入れることで、クラス全員で巡検するよりも、学びの意義があることが示唆された。

また、グループで学習に取り組むことにより、2 時間程度の短時間であっても、発表資料の準備等の活動を行うことができた。ただ、生徒によっては、グループで作業することに難しさを感じており、この点では課題が残った。

細かい点については課題が残るものの、グループ別巡検を取り入れ、1人1台端末を活用した部分については、おおむね順調に生徒も取り組むことができ、単元モデルの開発の観点からは、一定程度の成果があったといえる。

なお、本研究の実践校はいわゆる進学校であり、進学校だからこそできる実践だという考えを持つ方もおられるだろう。しかし、進学校も数多くあり、それらの学校についてはほぼ同様に実践できると思われる。

また、どの高等学校も固有の特徴を有しており、全ての

学校でそのまま実施できる授業はほとんどないと思われる。そのため、今回の実践をモデルとして、テーマ別の問いを立てて地域調査を行ったり、1人1台端末を活用したりした地域調査の授業を各学校の実情に合わせて改変し、追試をしていただけたら幸いである。他のタイプの学校においても、このような授業実践のモデルが出てくることを願うためにも、今回の実践は意義があったと考えられる。

¹ 日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B のいずれか一科目が必修だったため、日本史科目を履修すれば、地理科目を履修しなくてもよいこととなっていた。

² 「地図・GIS」の項目では、球面上の位置（緯度・経度）、地図の種類、地図の読み取り、地理情報システム（GIS）の活用等について学習する。GIS については、地理院地図などの WebGIS や GIS ソフトウェアなどを使用して、実習することが求められる。

³ jSTAT MAP とは、人口分布などの統計地図の作成が可能で地域分析などに使われている Web 地図である。

<https://www.e-stat.go.jp/gis/gislp/>（2025 年 2 月 27 日最終閲覧）

⁴ ただし、今井は 1 人で巡っても友達と巡ってもよく、スポットを回る順番も任意としているが、山内はクラス全員で同じルートと一緒に歩くという形式をとっており、同じワンポイント巡検であっても多少の違いがみられる。

⁵ Web 地図とは、地図の共有・作成・検索・利用などのシステムを持った Web 上で利用できる地図のこと。例えば、国土地理院の「地理院地図」などがあてはまる。

⁶ 本研究の授業実践時期について述べる。本来であれば、大項目 A「地図や地理情報システムで捉える現代世界」の実施直後に行うことを想定していた。だが、実践校の生徒が購入した学校推奨モデルの端末が届いたのが 6 月下旬であり、直後に夏季休業を迎えてしまう時期であった。また、大項目 A の後、大項目 B「国際理解と国際協力」の内容にすでに入っていた。そのため、本単元は大項目 B の途中で、内容の区切りがよいところとして 10 月下旬に開始し、11 月まで実践した。

⁷ 頭の中にあるメンタルマップは、はっきりと取り出すことはできない。しかし、手描きの地図を描くことで、大まかなメンタルマップを見ることができるとされている。

⁸ フィールドワークは広く現地調査のことを言う。巡検とは地理学・地質学において、様々な場所を巡り、その地域的事象・特色を見聞きし、客観的な情報・資料を得る活動のことを言う。つまり、巡検はフィールドワークのうち、一部を指す用語である。

⁹ 今昔マップとは、元埼玉大学教育学部教授・谷謙二氏（故人）が整備した、明治期以降の年代別の地形図を切り替えながら表示できる Web 地図である。

<https://ktgis.net/kjmapw/>（2025 年 2 月 27 日最終閲覧）

¹⁰ 戸井田克己ら（2022）『高等学校 新地理総合』帝国書院、p.220 実践校で 2023 年度に採用している教科書である。

¹¹ 割合（％）は小数第 1 位を四捨五入して整数に変換しているため、全ての項目を足しても 100 にならないことがある。他の質問項目も同様。

¹² 個人での発表準備、発表活動は本授業以前にも実施している。

¹³ 学校名に関わる部分は、〇〇と表している。

引用文献

- 池俊介（2012）「地理教育における地域調査の現状と課題」日本地理学会地理教育総説記事 7 巻 1 号、pp.35-42
- 石毛一郎・上野剛史・後藤泰彦・松村智明（2020）「千葉県公立高校における地理の授業時数と専門教員数」2020 年度日本地理学会春季学術大会
- 泉貴久（2021）「3 深い学びに向かう持続可能な地域づくり 4 地域の将来像と自分の生き方を問う授業モデル」、井田仁康編著『高校社会「地理総合」の授業を創る』明治図書、pp.154-163
- 今井英文（2012）「高校地理におけるワンポイント巡検の実践—岡山市立岡山後楽館高等学校の事例—」、松岡路秀ら編『巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践』古今書院、pp.98-106
- 太田貴之（2021）「【授業最前線】ICT 活用で変わる！ アップデート授業最新プラン 高等学校 地理 デジタル地図と Google フォームを活用した授業」、『社会科教育』、2021 年 8 月号、明治図書、pp.84-87
- 齋藤洋輔・松本至巨・金指紀彦・金子明久・木部慎也・佐藤亮太・田中義洋・豊嶋維・西村聖太・根本賢一・松川想・山北俊太郎（2021）「1to1（1人1台 PC）導入による成果と課題：1to1 導入の経緯・コロナ禍での休校期間の対応・1to1 を活かした授業実践」東京学芸大学附属高等学校紀要 第 58 号、pp.55-78
- 竹内裕一（2018）「『地理総合』を支える系統的な教員研修の必要性」経済地理学年報第 64 巻、pp.243-249
- 徳倉暢（2023）「高等学校「地理総合」における RESAS を活用した探究型学習の授業開発 —ESD の視点を取り入れた単元「生活圏の調査と地域の展望」を事例として—」早稲田大学教職大学院紀要第 15 号、pp.61-74
- 松岡路秀（2012）「巡検等の学習の基礎的考察とワンポイント巡検の提唱」、松岡路秀ら編『巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践』古今書院、pp.2-7
- 文部科学省（2018a）「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）」
- 文部科学省（2018b）「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 地理歴史編」
- 山内洋美（2012）「高校地理におけるワンポイント巡検の実践的考察—仙台平野の氾濫原における事例—」、松岡路秀ら編『巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践』古今書院、pp.107-116
- 山本晴久（2022）『「主題」と「問い」でつくる地理総合』明治図書
- 山本晴久（2024）「生活圏の調査と地域の展望」、千葉県高等学校教育研究会地理部会 編『新しい地理の授業 改訂版「地理総合」の魅力を引き出す授業実践集』二宮書店、pp.202-203